

# 伊東・音然時報

「音然」とは、「良き知らせ」をうけて社会の様子が刻々と変化するさまのこと

## 山あいでは天使の大軍

羊飼いたちの目撃情報によると、深夜に天使の大軍が現れたとのこと。

## 「羊飼いの証言は信用できないのでは」

一方、情報源に対する疑義も提出されている。羊飼いは定住生活を行なっておらず、安息日律法を遵守しない市民生活圏外の階層であるため、現在行われているユダヤ近郊の住民調査の対象からも漏れている状態。「このような人物たちの証言は受け入れられない。もっとも、羊飼いはかの尊敬されるダビデ王の元職でもあり、本来は誇り高いもの。現在のような低い位置に押しやられた背景として社会的なねじれがあることは否定できない」という識者の声もある。

## 「現地へと急ぐだけ」進む拡大、歯止めなし

もっとも、社会の大多数の声など意に介せず、彼らは天使の示す目的地に急ぐ。当初懸念された感染拡大よりも、救い主の誕生の知らせの拡大の方が急速であるという指摘もあり、現在いわゆる「福音」の拡大は日本の伊東市にも波及している様子。

## 新星？各地で異変相次ぐ

中東の都市エルサレム近郊で観測された謎の新星は、その後も移動を続け、ベツレヘム上空にとどまっている。

## 東方より巡礼者が続々と流入

この新星の情報を受け、世界各地より人が集まっている模様だ。人口移動は感染症拡大に貢献する恐れもあり、当局はソーシャルディスタンスとともに不要不急の移動を避けるよう呼びかけを引き続き行っているが、巡礼者たちは「帰りはさらに別経路でとお告げを受けた」と述べるなど、波紋はおさまらない様子。

## ドイツでは子どもたちが巡礼者に扮する

報道によると、ドイツでは今年も子どもたちが巡礼者に扮し近隣世帯を訪問し、新しい年号をチョークで記しておひねりをもらう習慣が持たれた。以下の写真は現地新聞のもの。

(編集部注:「三人の博士」という伝統的な表記は、原語

「Magi」の語意に従い「王」「学者」などに訳せますが、本稿ではドイツで少年たちが「星の歌い手」と呼ばれる慣例によって各世帯を回ることによって「巡礼者」と表記します。)





## 巡礼者や赤子の正体は？

巡礼者たちは、黄金や乳香、没薬などを持参している。これは伝統的には「救い主が赤子として生まれ、王としての権力を持ち、十字架にかかって死ぬ」ことを示唆する贈り物であるとされ、贈り物の高価さから「異国の王たち」こそ巡礼者の正体であるという説が有力であった。しかし、海外における「星の歌い手」と呼ばれる慣習の存在は、彼らが「漂流の民」であるという推理が可能になる。「実態としては、かつては王であったが、捧げ物によって貧しくなったのではないか」という理解をする識者もいる。「そもそも、有り余るお金のごく一部を神に捧げて自分は金持ちのまま、というのは宗教的な奉獻の考えには合致しません」。

感染対策に詳しい関係者によると、巡礼者たちの移動が世界規模で起こっているのと同様に、羊飼いたちも境界を超えた移動を職業上必須としている。いわゆる不要不急の定義には当てはまらないため、「ソーシャルディスタンスだけは守って」と呼びかけている状態。

これら越境者たちが目指す救い主とは誰か。先の識者によると、「神の人間世界への越境が起こり、赤子の誕生になっているのではないか。救い主が赤子であると驚くべきことだ」と語る。

## 「ソーシャル」は再定義されねばならない

昨今声高に叫ばれている「ソーシャルディスタンス」だが、東海教区社会部の見解によると、「ソーシャル」の意味が理解されていないままで用いられているという。以下、本年二月に持たれた「教会と社会セミナー」の様子を再現する。

ソーシャルとは、「みんな、仲間」を意味する言葉で、たとえば「台所のケーキはソーシャルだ」といえば、誰でも食べていいということ。「ソーシャルただ乗り論」は近代に広まった誤解だ、と講師である上田彰牧師(伊東教会)は語る。「WHOも最初はフィジカルディスタンスという用語と併用していました。しかし、あなたのことを思っていますよ、というメッセージを発信しあうことなしには現状を突破できないという理解から、ソーシャルディスタンスという言葉が急速に広まった」。

同セミナーは昨年度と今年度、各三回企画され、次回二月二十六日に佐々木炎氏を講師として持たれる予定。また次年度はセミナーを一回持つ他、一泊のフォーラムを秋に予定している。報告集請求や問い合わせは教区社会部まで。

## 各地のクリスマス

世界各地で祝われるクリスマスだが、日付は微妙に異なるという。アメリカ合衆国など北米では25日に祝われるが、「クリスマス・イブ」とは「クリスマスの前日」という誤解も生じている。

「イブ(イブニング)つまり夕方の日没から新しい一日が始まる、というユダヤ教の慣例がもとにある、

とされる」。ヨーロッパ人はこの慣習を知っているので、クリスマスをイブに祝う。

## 伊東教会など市内でもクリスマスが祝われる

日本でも、本当のクリスマスを知ってほしいという願いから、各教会が準備をしている。ここでは伊東教会の取り組みを紹介する。(すでに開催したものは日付のみ)

十六日 平和の杜クリスマス  
十九日 主日クリスマス  
二十一日 子どもクリスマス  
二十三日 十字の園クリスマス

二十四日  
二時より四時まで 音楽会  
六時半より イブ礼拝

二十六日  
十時二十分より 主日礼拝  
説教 須田拓牧師

(橋本教会、東神大教授)

二時より 同教授による講演

同教会では、十一月恒例の市民向け特別伝道礼拝(芸術作品を取り上げての入門プログラム)を皮切りにクリスマス行事を展開してきたが、クリスマス期間のツリーとスターの点灯も毎日夕方以降行っている。このために扉の窓の拡張工事を行い、コロナ禍での礼拝の様子が市民に公開される副効果もあった。「立ち止まって覗き込むと幻想的な風景が広がっている」とは通行者の弁。なお、点灯期間はクリスマス終了である一月六日まで。問い合わせは伊東教会。

0557-37-5248

[itokyokai1907@gmail.com](mailto:itokyokai1907@gmail.com)

<https://itokyokai.jimdofree.com/>